

就労支援部会報告

社会福祉法人復泉会 大石 影子

「私たちはなぜ「それ」をするのか」

自分たちの「取り組み」を深く掘り下げ、

働くことの支援を改めて考える

これまでの作業所学会では、職員や利用者の『はたらく』を様々な角度から考え、昨年度は、支援者としての醍醐味というテーマを通して、葛藤や苦悩の先にある楽しさや、やりがいについて報告していただきました。支援についての課題と同じくらい、職場の人間関係や意思統一など、チームマネジメントを課題と感じながら、その課題に向き合う事で仕事に対するやりがい等につなげている人が多くいることがわかりました。

そして、今年度は、具体的な取組内容に焦点を当て、『私たちは、なぜ「それ」をするのか』というテーマで自分たちの取り組みを、振り返り、どんなことをしているか？だけではなく、なぜそれをしているのか。始めた経緯やそこに至るストーリーにも着目し、深く掘り下げること自分たちの取り組みを語れることを目指しました。それにより、全体討議では、何かを始める時の思いや支援を通した楽しさや、やりがい、販路や宣伝などにも焦点がいく内容となり、発表者だけでなく参加者も新しいことに挑戦する楽しさや大変さを共感しながら、それぞれの今後の展開に期待が持てるような意見や情報交換の場となりました。

発表者① NPO法人 おひさま 太陽の家 海野秀美

「菌床椎茸の栽培」

菌床椎茸の栽培作業について、当時を振り返りながら、発表して

いただきました。きっかけは、地域の農家さんから温室1棟を障害のある人の働く場所として利用してほしいと提供があった事でした。椎茸栽培にたどり着くまでには、作物を育てて売ることの大変さを感じながら試行錯誤したことが伺えました。そして、栽培においては、作業所から離れた温室で作業することの課題、特にトイレの問題や暑さとの闘い、休日の作業など、様々な課題や大変さがある中で、職員の「お客さんに喜んでもらえる椎茸を創りたい」という思いが、利用者さんへの作業提供を通した支援スキル向上につながっていることやコミュニケーションを通した利用者さんとの信頼関係づくりが作業での自信となり、それが行動に現れ、「その人の楽しみや、やりがいにつながっている」という連鎖のすばらしさと、影響し合う関係のすばらしさを感じる発表でした。

そして、今回発表することで、今までの経緯などを言語化し、掘り下げること、そもそも私たちの役目・使命にも立ち返り、「固定概念を外して自由な発想で、利用者が楽しく生きがいをもってやる仕事をこれからも見つけていきたい」と言った言葉がとても印象的でした。

また、参加者からは、価格や販路についての質問があり、椎茸の価値を評価してくださる地域のお店や東京の飲食店での利用など、この椎茸の価値を今後どのように展開し販路を広めていくのかが楽しみになるとともに、一度食べてみたいと思う発表でした。

そして、この作業を楽しむように行う利用者さんが私たちの宝物だと話す海野さんがとても素敵でした。

発表者② 医療法人好生会 はまかぜ 山本恵理子

「餃子からナマズへ」 なぜナマズをやるのか

2人目の発表は、題材だけでも興味をそそる「餃子からナマズへ」です。そもそもなぜ餃子を始めたのか。一人の職員さんの餃子愛から始まり、キッチンカーで餃子を販売する販売員になることが利用者さんにとつての憧れとなっていたと話します。しかし、物価高騰や人材不足などが要因となり、売り上げは伸び悩み。そこで登場するのが「ナマズ」です。はじめこの作業提案を聞いた時は、「突拍子もない提案に思えた」と話す山本さんでしたが、「工賃を上げたい」「利用者さんのモチベーションが上がるようなことをしたい」と予想できない取り組みに期待が生まれ、新たなことへ挑戦してみようと気持ちを切り替えたことが、とても素晴らしいと感じました。作業においては、毎日行うことを習慣化し、行いやすくすることで苦手とする作業も積極的になった利用者さん。多くの新聞やテレビの報道も利用者さんのモチベーションにつながり、「誇らしい気持ち」や「自信」にもつながり、利用者さんが目をキラキラさせてナマズの作業に取り組む姿が目に見えような発表でした。

その反面、今後この作業を続けていく中で、ナマズの作業を就労支援としてどのように活用するかが課題であると話します。

そして、改めてなぜ始めたのかに立ち返ることで、そもそも授産製品を作る過程において、目的を見失わないためにも職員間で共有することの大切さや授産製品を作ることが目的ではないこと。授産製品や委託業務は、就労支援の手段であることに気づいたと続けます。

さらに今後の展望として、仕事なんてどうせ無理とあきらめない私にもできるかもという希望や自分の可能性、自分らしさに気づけるような支援ができる事業所になる事。そして「ナマズを食卓の当たり前に」とナマズを食べることが当たり前になることでやりがいや自信が一層持てるようになること。だと話し、発表を締めくくります。

ました。

質疑応答では、ナマズの市場についての質問があり、白身魚として販売されていることや岡山では回転ずし屋で人気の商品であることを知りました。

就労支援部会ということもあり、事業への初期投資や助成金の活用、価値としての評価や販路、事業所間連携など多くの意見交換を行うことができました。ありがとうございました。

まとめ

今回のお二人の発表から新たな作業に挑戦する「一歩を踏み出しやってみよう」という気持ちや、そこに携わる職員の思いが作業を行う事だけでなく、利用者さんのモチベーションにつながる事が分かりました。そして、関わり合う事、できることが増える事が利用者さんにとつての楽しみややりがいとなり、その利用者さんの笑顔や楽しそうに行う作業姿が、職員のモチベーションなること。そしてこの連鎖が何よりの支援となり職員の学びにもなっているのだと感じました。

また、取り組みを発表するというこの場が、そもそもの思いを掘り下げ、それぞれの事業所の理念や目的、目標を明確にしていくことにつながるということを明らかにした報告だったと思います。

就労支援を考える際、いろいろな題材や取組があると思います。今回あえて具体的な取組に焦点を当て、そもそも何故それをするのかを考えることは、発表者だけでなく、所属する事業所全体で考える場となり、経緯や歴史を改めて知ることや、それを語れるようになることが、これから進もうとする未来に向けた意思統一やベクトル合わせになることが明確になりました。

今後この作業所学会が、職員、利用者それぞれが明日への一歩を踏み出す場になるよう部会として目指していきたいと考えます。